

序 論 本書の中心的課題、ならびにその射程

(a) 江戸後期儒学の評価

本書は、十八世紀から十九世紀中葉ぐらいまでに台頭した日本儒者における考証学的な色彩の強い中国古典テクストの文献・書誌研究の実相を、日本思想史のみならず中国近世思想史、教育史などの知見も適宜引照しながら考察し、さらにその底流にある思想・哲学について、西欧において発展した文献研究と比較しながら考えることも目的とする。ただし、考証学的な学問方法の発展はおおよそ十七世紀後半頃より始まっており、本書ではこの時期に萌芽をみる学問も意識すると同時に、江戸後期学問をさまざまな意味で基盤とする明治以降の学問方法も視野に収める。

いうまでもなく十八世紀は、荻生徂徠（一六六六―一七二八）とその周辺における経学、言語の学、詩文等多様な方向での学問発展とその刺激による折衷的、考証的学問の勃興、あるいはまた一方においては正学派朱子学の興隆（あるいは「再興」）をみ、この儒学界での動きはさらに国学の諸派、蘭学研究の発展をも触発した。さまざまな思想分野の誕生と相互の交錯、対抗の様相は、前田勉『江戸後期の思想空間』にも詳しい⁽¹⁾。

さて、日本における中国哲学研究は、「最近までは、経、史、子部の古典解説に狩野（直喜——筆者）以来の、清朝考証学の成果を利用することがごく一般的であり、これが、清朝考証学を「中国哲学研究の対象として客体化」することを「遅らせた」と論じるのは吉田純である⁽²⁾。この論の是非については当該分野の専門研究者に委

ねたいが、①研究「手法」が研究「対象」として明確に意識されず、結果、ややもすれば、研究の方向性、そして成果に偏りが生じているという点、さらには、②あたかも宋学あるいは朱子学以外には「哲学」が存在せず、日本儒学においても十八世紀以降は「方法的進化」以外の特筆すべきものがないと考えられている傾向が、すくなくとも一部の日本思想史研究者において前提されている状況に鑑みると、上の吉田の言葉は、日本儒学／漢学研究、とりわけ幕末漢学の研究にもあてはまるというのが、筆者の基本的な立場である。

たとえばこれまでの日本思想史分野での儒学研究は朱子学に焦点をあてたものが多く、幕末―明治初期政治思想史的研究においても、「漢学」というよりも「儒学」、とりわけ朱子学の概念、世界観、道徳観をもって日本近代知識人が西洋思想をいかに受容したかという点の考察を主眼とするものが多く、朱子学から西洋哲学に対抗し得る哲理を析出する「哲学的」営み、あるいは儒学との連続性を保ちながら、その観念を意図的に動員しながら西洋哲学を読み解くことを旨とするものが主流であるといえよう（本書第一章第二節（a）参照）。

しかし、幕末の漢学者、さらには狩野直喜（一八六八―一九四七）、内藤湖南（一八六六―一九三四）、武内義雄（一八八六―一九六六）といったあたりの世代までが保持していた「漢学の素養」とは、どちらかといえば上述の如きものとは異なる、考証を旨とする学的素養であり、しかもそれは、「消閑の具」といったものとは真逆の、右の吉田の言葉を借りれば「凄絶なまでに激しい学問への情熱」を基底とする、真摯な学究的活動であった。

（b） 日中儒学の差異——その特徴と担い手

いうまでもなく思想の特性は、社会的、経済的、政治的環境与件と不可分な関係にあり、特定の環境与件下において儒者は、いわゆる被投的投企の状況、すなわち一定の状況に制約されつつ（被投性）みずからの可能性を投企し選びとる（実存）といった状況に位置づけられている。おおよそ、哲学的（あるいは、具体的に、「朱子学

的) 思惟、あるいはまた政治思想／理念そのものに *‘learn-ing’* することが多くの場合その前提である中国士大夫層⁽⁴⁾とは異なり、江戸後期の日本の儒者の多くは、政治状況よりもむしろ、社会＝経済的与件との密着度が高い「市井の人」が思想的営為の担い手の「多数派」を占めていたといえ、とりわけ江戸後期～幕末の考証学を担った多くの儒者はこの属性にある人びとであった。思想形成の重要な与件であるこの点に関しては、中国哲学や旧来型の日本思想史研究よりも、筆者も長くかかわる日本経済思想史の知見がヨリ強い注意の喚起を促す⁽⁵⁾。

すなわち、経済史的にみると、大開墾や都市人口の急激な増大、長大な物流ネットワークの生成は江戸時代前半期におこり、その後のとくに十八世紀後半から十九世紀前半までの時代は「転換期」と称され、この時代の経済社会は、商品生産の深化、とくに小農による商品作物生産と彼らの市場経済への参入、それによる地域間分業の再編成を特徴とする⁽⁶⁾。つまり十八世紀後半以降の時代は、「市場」を前提とした商材、ものづくりが、都市とその周辺、そして地方の「一般人」において日常化する状況であり、とりわけ天明年間(一七八一～八九)から文化年間(一八〇四～一八)にかけての民間経済主体の興隆を「天明のレッセ・フェール」と形容する日本経済思想史の専門研究者も存在する⁽⁷⁾。

このような経済の発展状況を踏まえ、儒者の様相に目を転じると、まず、明和～天明期(一七六四～八九)前後には井上金峨(一七三二～八四)、中井履軒(一七三二～一八一七)、吉田篁墩(一七四五～九八)、山本北山(一七五二～一八二二)といった緻密な文献考証を主導した儒者が存在する。つづいて文化～文政期(一八〇四～三〇)には大田錦城(一七六五～一八二五)、松崎慊堂(一七七一～一八四四)、狩谷棧斎(一七七五～一八三五)ら考証学を「成立」させたとされる一群の儒者がある。彼らの「属性」は、ほぼ例外なく「市井の人」としてのそれである。北山は武士であったが、彼は藩士としての出世競争などとはまったく無縁であった。さらには幕末に台頭した東條一堂(一七七八～一八五七)、海保漁村(一七九八～一八六六)、安井息軒(一七九九～一八七六)らも「士大夫層」と

いった属性にはまったくない身分の儒者であった。

かような、江戸後期以降の日本儒者における政治Ⅱ理念との密接性の低さ、あるいは「literati」としての属性の欠如、そして逆に、社会Ⅱ経済史的側面との密着度の高さ、あるいはもつとあり体にいうと、日々の経済活動に直接従事している人びとを日々見ていた／まさにその日常に生きていたという事実は、これら儒者の知的営為における、とくにジョン・ロックの経験論に明示されるような「経験」と認識「対象」との「連合」のあり方における、とくに認識対象と類似せるものに関する「記憶」とその蓄積を前提とする新たな認識の連鎖を考える上で極めて重要であり、これこそ儒者と古典テクストとの連合の前提的事実をめぐる日中儒者の間の差異の考察においても意識すべき点である。

かくなる論点に鑑みると、武内義雄、加藤常賢（一八九四～一九七八）による以下の論評は重要な意味をもつ。武内はすでに戦前において、清代の考証学者は優れた校勘・訓詁の学を樹立したが、彼らは「経書を神聖視してこれを批判することを遠慮し」、「書物の原典批判は（清学においては——筆者）まだ十分に採択発展せられていない」と述べ、これは「我が国の先儒によつて」「啓かれた」と述べている。加藤は、清学の到達点にある江聲、孫星衍、段玉裁といった考拠家にあつても、彼らは「古代の聖王思想の信者であり、近代科学以前の人々であつた」と断じている。⁽⁹⁾とくに武内は、考証における客観性と政治色のない実証性、聖賢の道や諸子の説をも客観的観察対象とする学問姿勢は日本においてより高度な発展をみたとしている。

武内の言の背景には当然、吉川幸次郎が指摘することく、当時「護教的」であつたと（少なくとも京都帝大の漢学者らには）目されていた東京帝大漢学科、あるいはまた、井上哲次郎に顕著な「西方の基準をただちに中国に習会する安易さ」「通俗性」といった批判対象があり、これらに對し、とくに江戸後期以降発展をみた日本儒者の考証学の顕彰、それを継承した己れの学問、そして京大漢学科の優位性の賞揚の意図もあろう。それはそれ

として、右のごとく、とりわけ戦前の一時代において、上記の碩学による日・中儒学研究法の特性に關する明快な言及があり、またこれは、西欧における文献批判の歴史、學問方法發展史に鑑みて極めて注目すべき点であるにもかかわらず、ともすれば戦後の日本儒者研究はこの点を等閑視していた感があるといえる。

幕末までに發展をみた日本儒学・漢学における高度な文献批判を枢要とする學問方法が、近代日本の諸學問、とりわけ近代史学の研究手法の成立に大きな役割を果たしたことについては、漢學者であり近代史学の創始者でもあつた重野安繹（一八二七―一九一〇）、久米邦武（一八三九―一九三一）らが明言するところであり、彼らは、ランケ史学の「移入」よりもむしろ、漢学の學問方法の重要性を指摘する（第一章参照）。しかし一方、彼らは、「清朝考証学」の役割を夙に指摘（これも第一章にて言及）するが、さきに触れたごときの武内、加藤らのような清学と幕末考証学との差異については頓着していない。そしてこの点が不明瞭なままに放置され、現代の歴史學者においても無批判に繼承され、さらにはむしろまったく逆に認識されているのは、次の宮地正人の語にも象徴的である。

一八七五年（明治八）四月、修史局設置とともに薩摩出身の漢學者重野安繹（一八二七―一九一〇）が入局したことにより、重野が指導的立場に立つようになった。重野は昌平校に学び、幕末期の最も正統な漢学教育を受けただけではない。典拠と実証をなによりも重んじる清朝考証学派の學問を深く学び、旧藩時代には、藩の修史事業の責任者となつていた。⁽¹¹⁾

ここで宮地は、歴史学の枢要である「典拠と実証」の基盤は「清学」にあるとしている。逆にここでは、「幕末期の最も正統な漢学教育」はこのような近代的學問方法とは無関係のものと位置づけられているのは明らかで

ある。そしてこのような誤った事実認識は、「伝統的」日本儒学／漢学と「近代」歴史学がまったく関連しない、あるいはそれどころか、「近代的」学問発展の阻害要因であったとの認識を多くの識者において助長する遠因となつているともいえよう。

(c) 「典拠」と「実証」／客観的テキスト研究と原典批判

時代をすこし溯るが、たとえば第二章でとりあげる中井履軒は朱子学を奉じる（とされる）懷徳堂の重要人物であるが、彼の『論語』注釈は、朱子の『集注』が經典の各編、各章に内在するコンテキストを解体し、「經書全体を束ねる世界観や人間観」を歪曲するものとして大いに批判するものであるのは、久米祐子の研究にも示されている。⁽¹²⁾ 久米の研究は履軒の注釈の重要な特徴を析出するものであり、その朱子批判の先鋭さを適切に描写する。

加えて、履軒はさらに、經本文も忌憚なく批判、またそれは、細かい字句の改訂といった次元にとどまらないものであり、これは、リチャール・シモン（一六三八―一七二二）やジャン・アストリュック（一六八四―一七六六）らによる『聖書』の著者の複数性の摘発、著述の時期と場所の「歴史性」の析出努力と「真書」の確定への努力、あるいはジョセフ・スカリガー（一五四〇―一六〇九）やアイザック・カソウボン（一五五九―一六一四）らの文献批判にも比肩し得る原典的批判的考察を試みる営みである。かような原典批判の、十八世紀日本の社会Ⅱ政治的状況も勘案しながらの世界史的位置づけは、本書が企図するところの一つである。

無論、各々の儒者は各々個別の経験の絶対的な唯一性の保持者であり、その解析にむけては、単に社会的、政治的要因等への還元が終わることなく、さまざまな個の形成要因の有機的勘案に基づく被投的投企の様相の現象学的分析が必要となろう。逆にいうと、ある属性の儒者の思想が、その儒者がいちおう帰属する（とされる）

社会層を無限定に代表し、そこから何らかの集団的特性（法則性）を見いだし得るものではない。しかし一方で、個々の儒者におけるテキスト考察過程の詳析とその方法自体のつづさな客観的考察を怠り、あくまで「個々の」研究事象からつむぎ出すという作業を経ることをせず、何らかの即製の理論をふりかざして大上段な議論に終始することからは、その時代の思惟様式の粗野な決定論的素描以上のものはつくりえないのは論を俟たないであろう。

このような問題意識を常に抱きながら、本書では、①概ね十八世紀～十九世紀前半の日本において、十八世紀末頃までに西欧において発展をみた客観的考証的テキスト研究を基盤とする厳然たる原典批判に比肩し得る学問が存在したこと、②それはまた、従来型の「注釈」(commentary) または'exegesis'、あるいは'interpretive and commentarial scholarship' とは次元を異にする、西欧文献研究発展史の泰斗アンソニー・グラフトン(Anthony Grafton) がことに強調するような、技術的で高度に体系的・客観的な文献研究手法と形容できる学問方法⁽¹³⁾であったこと、③その担い手のほとんどが、「昌平校教授」や諸々の藩校の重鎮ではなかったことを呈示することを目指す。そして、彼らの実践していた学問方法は、大久保利謙の「史学史上からみる場合にはもつとひろく考証の学風として解釈する」べしとの端的な指摘に象徴される(第一章参照)ごとくの、いわゆる「儒学」あるいは「漢学」という範疇を超えたものであった。

大久保は、江戸後期～幕末儒学を「反道学」、あるいは反朱子学的「自由性」を保持した、官学的道学を嘲笑するニヒリズムを有する学問と表現しており⁽¹⁴⁾(また、第一章参照)、これは、ともすれば一部の儒学研究からのいらぬ反発も呼ぼう。しかし、昨今とくに西欧の学界において活況を呈する学問方法発展史または文献研究手法発展史の知見に鑑みると、大久保の指摘は江戸後期以降に発展をみた日本漢学の極めて重要な意義を見いだすきっかけともなるポイントである。

すなわち大久保の言葉には、幕末考証学者においては「儒学的世界観」に規定された学問態度とは異質の、たとえば Benjamin A. Elman が継続して主張する 'epistemological revolution' との語をもって主張する事象⁽¹⁵⁾にも通底する、本質的に異なる学的態度の転換が包摂されていたことを示唆するものである。そして本書はまさに、全体をつうじて、かような学的現象の「根底にあるもの」、あるいはすなわち、聖人・經典を尊崇するも絶対視せず、經典のなかの「真なるもの」の確定にむけた文献研究の過程においてはこれらをひとしく「考察対象」として相対的地位に定位し去ることを可能せしめた「知的基盤」にも思考を及ぼせ、P・ブルデューのハビトゥス論、彼の『芸術の規則』に主張されている論点、さらには、現象学的知見なども適宜意識しながらこれらを解明することを意図するものである。

ただし本書は、こうした思考、論理のモデルに史実、史料を「あてはめる」ことをもって表層的な理解にとどまる「理論主導型」の諸研究とは一線を画するものであることは、第二・七章の個別研究をもって示してゆくところであり、その理由の一部は本論にても略述した。

(d) なにをもって「哲学」とするか

考証を旨とする学問、つまりは江戸後期～幕末の〃市井の〃漢学者から狩野、内藤、武内らに継承された学問は、ともすれば純粹思想史的ないし哲学的営み（さらには、これらはいさば暗黙のうちに「朱子学的」営みと同一視される）よりも〃劣った〃知的営み、あるいはまた、儒学の哲学的諸相の探究とは相容れないもの、それを覆い隠してしまいかねないものと考えられがちで、往々にして日本思想史分野の研究者による江戸儒学研究には、考証学的儒学にたいしてアプリオリに——しかも無意識的に——こういった限定をあてはめて考えている節があると筆者は考える。

そしてこれは、「清朝考証学」に対する従来の誤った、あるいは少なくとも偏った理解を匡さんとする木下鉄矢の問題提起を想い出させる。⁽¹⁶⁾ 木下は、「フィロソフィーからフィロロギーへ」というテーマ設定のもと、清学を「文献実証」一辺倒と考える問題設定、⁽¹⁷⁾ 翻つては清代の学は周到なるもその考拠の学からは経世の志が喪失に向かったとする説などを批判する。前者の説では「哲学」から「文献学」への「連続」と「断絶」といった静態的な二項対立の図式に問題を単純化・矮小化し、本来ポリフォニックで多重的である時々代々の思考活動を単純な図式に還元する危険を伴い、後者においては、表面的には緻密なだけの学究活動と映るも、内に真実の追求における強い「志」、「正」と「義」への強靱な意識を胚胎させる営為であることを看過させ、さらには「学問のための学問」と「経世意識」、あるいは「志」といったものを相反する要素と誤認せしめる危険を孕むとする。⁽¹⁹⁾

これは重要な指摘で、道理を声高に賞揚する「道学者」、あるいは経世論者の営みと、肅々と真実の探究に専心する「考証学者」の営為と一体どちらが「正当な」学究活動か、あるいはどちらが「道義にかなった」営みかの精考を促そう。中井履軒は『雕題畧』緒言にて「唯平心書を読みて愛憎を新故に生ぜず、深く古經の未だ瞭かならざるを慨^{ふし}きて、聖人の心後世に伸びざるを痛み、憤るが如く悶ゆるが如く、寝を忘れ食を忘れ、毀譽得喪を度外におき、砢砢鑽攻して老の將に至らんとするを知らず、然る後始めて与に經を論すべきのみ」と主張するが、これに表徴せられるところの学究態度は注目に値しよう。⁽²⁰⁾

これまでのところ、「江戸後期」の「考証学」への日本思想史研究者の視線には、木下の指摘するところ、あるいは履軒の標榜するところへの十分な配慮があるようには筆者には思えない。

江戸後期―幕末の漢学者／考証学者の思想的営為を「哲学」と認知しない、あるいはその底流にある哲学を看取しようとする努力がこれまで為されなかった理由はさまざまであろうが、一つには、哲学を専門領域としない多くの研究者には見過ごされがちな、あるいはまた、表立って「哲学的と看取しにくい哲学、たとえば、E・

フッサール、M・メルロー＝ポンティなどを代表とする、哲学的営為を行なう主体自体、または「媒体」としてのそれを構成する諸要素の抽出とそれらによる媒体の複合的・有機的「産出のされかた」といったものを考察する知的行為が、すくなくとも「日本思想史」の分野では「哲学」と意識される機会が極めて僅少であったのも理由の一つであろう。

たとえば儒者と古典テキストとの関係をメルロー＝ポンティの思惟図式に即していうと、儒者はテキストに身を挺しつつテキストを開示してゆくが、開示されるテキストは儒者の知的作業との連動性においてその基軸を転位させる。テキストの開示可能性は無限定であるが、その開示のされようは、儒者の思惟様式を生成する状況乃至構造と連動する性質のものであるのは、ジョン・ロックの経験論や、彼による主体の認識対象と記憶との連合説を俟たずとも明らかである。しかし、たとえばかようなテキストと向き合う主体自体を構成する諸要素自体にも意識を向け、その上で、*“Philosophies of philology”* すなわち緻密な文献研究を鋭意すすめる主体における、それを裏支えする思惟／哲学に注意をむける、といったことに留意した儒学研究、幕末考証学研究はいまだあまり類をみないといえよう。本書を通じてこの点は格別に意識したいポイントである。そして上述の主体乃至媒体を構成する要素の一つは、十八世紀日本においては、前節にて言及した社会Ⅱ経済的与件との密着度が高い「市井の人々」であること、である。

*

*

*

右にあげた狩野、内藤、久米、重野、さらにはその次の世代の漢学を担った武内義雄（一八八六―一九六六）らに引き継がれた漢学は、学問方法面では前述の井上金峨、中井履軒、吉田篁墩、山本北山らにはじまり、大田錦城、松崎慊堂、狩谷棧斎らにおいて大いなる発展をみた考証学、さらには東條一堂、海保漁村、安井息軒らの学問を継承するものである。さらにいえば、この方面の学問は、十八世紀初頭～前半期の儒者による経学研究、と

りわけ山井鼎（二六九〇～一七二八）、根本武夷（二六九九～一七六四）、太宰春臺（二六八〇～一七四七）、そして京坂の伊藤東涯（二六七〇～一七三六）・蘭嶋（二六九四～一七七八）兄弟、さきの中井履軒らに顕著な緻密な文献学的、書誌学的学問方法を批判的に摂取し、さらには、古代言語への意識という側面では荻生徂徠（二六六六～一七二八）、春臺、東涯らの学問に淵源するものである。

一方、伊藤仁斎、徂徠あたりには顕著であった「宋学をのりこえる」ことへの気概、それとの「格闘」といった姿勢が、東涯、履軒、あるいは篁墩、錦城といった儒者においては後景にしりぞき、特定の時代、一家の学への格別なる評価、過剰な批判といった姿勢が消え、孟・荀、漢代諸家の学から宋学、徂徠の学問まで、諸家の説の得失を斟酌し、各々を相対化しながら一連の儒学発展の系譜として捉える姿勢がみられる⁽²¹⁾。彼らは、十八世紀前半以来の經学手法を飛躍的に進展させながら、その客観的、学問方法を軸に、儒学的世界観からの「解放」を目指した学究活動に邁進したのだが、とりもなおさずそれは、近代学問の基本である客観性と高い実証性、それをもって既成思想の束縛をのりこえ、聖賢の道や諸子の説をも客観的観察対象とする気風を用意したのである⁽²²⁾。そしてこの、「事実」「史実」を「客観的」「批判的」に析出し、特定の教義に規定された論述を「妄論」とする旺盛な批判精神に基づく知的作業は、ヘロドトス『歴史』の伝統を継承したビザンツの歴史家たちとその末裔のような「例外」はさておき、すくなくとも十八世紀世界という時空においては、世界史上極めて「稀有」なものである。

無論、西欧における原典批判の歴史は長い。かの地における文献研究については本書で適宜言及し、また、その発展系譜の全体像に関しては別稿⁽²³⁾にて俯瞰するが、概ねルネサンス後期のアンジェロ・ポリツィアーノらに代表される初期キリスト教テクストの原典研究における体系化に端を発し、十六世紀後半～十七世紀初頭に活躍した前出のジョセフ・スカリガー、アイザック・カソウボンらの原典批判はこの時代の到達点を示す。さらには法

学・医学の発展とその文献学的、臨床的、解剖的研究手法の人文研究への流入は、西欧における客観的文献研究を飛躍的に進展させた。それでも、かの地においては長期にわたってキリスト教的歴史哲学の支配が続き、それとの長く血腥い抗争の末に、近代の歴史哲学が本格的に市民権を得るに至ったのは、ようやく十八世紀の末になってからであったのも事実である。

西欧におけるかような文献研究の発展のどの段階が十八世紀日本のそれと比肩し得るか、あるいはどの程度の客観的分析の「広がり」をもって、それが定型化された学問的事象と認知されるべきかについては断定の難しいところであるが、筆者は、これとの比較は、日本儒学の重要な側面を学問の世界史的比較研究の俎板にのせるものであると考える。⁽²⁴⁾

J・B・ヴィーコ『新しい学』、F・A・ヴォルフ、G・ヘルマン、A・ベエク、F・D・E・シュライアマハーらの「ドイツ・フィロロギー」、そして、とりわけベエクの『文献学的な諸学問のエンチクロペディー』ならびに『方法論』はその到達点を示すが、これの刊行は十九世紀後半である。これに対し日本では、十七世紀後半期より文献研究が盛んとなり、江戸中期をむかえるまでに既に高度な水準の文献研究が存在していた。さらには、文献批判の水準、体系性と客観性のみならず、原典批判の伝統、所謂「Canon」とされる文典を純粹に「考察対象」として客観視する姿勢もその大いなる特徴であった。^{*}「親験実試主義」とも形容される（内藤湖南）この学的伝統こそが、十八世紀以来つづく日本儒学の重要な特質であり、これすなわち実証主義をもって基本的条件となす近代科学研究と等質の学問姿勢である。

〔注〕

（1）ペリカン社、二〇〇九年。

- (2) 吉田『清朝考証学の群像』（創文社、二〇〇六年）。引用箇所は「導論」より。
- (3) この方面での業績は秀逸なものに限っても枚挙に遑がないが、近著ではたとえば土田健次郎『江戸の朱子学』（筑摩書房、二〇一四年）、澤井啓一『山崎闇斎』（ミネルヴァ書房、二〇一四年）など。
- (4) 無論、たとえば乾嘉期の江南の蔵書家なども清学の重要な担い手の一群であり、彼らの多くは必ずしも「士大夫層」にあつたわけではない。しかし彼らの学問関心も、江戸中期から幕末日本の儒者とはかなり異なるのは、本書でも適宜論じてゆく。
- (5) とりわけこの分野の学問を長く担い続けていた中井信彦、そして小室正紀の業績はこの点への注意を喚起する。とくに、古くは中井『幕藩社会と商品流通』（塙書房、一九六一年）、最近では小室『幕藩制転換期の経済思想』初回会合報告（二〇一四年十月十一日、於…慶應義塾大学）。前者は経済思想というより経済史的な業績であるが、底流における「思想」への意識が大いに看取できる研究であり、その時代区分の図式も含め、今なお示唆に富む書である。後者は「報告」であるが、氏のこれまでの研究成果の主旨が凝縮されたものである。川口浩の「江戸時代の『経済思想空間』（『政治経済学雑誌』（早稲田大学）第三四五号、二〇〇一年）をはじめとする、氏による諸論考も示唆に富む。同氏の研究報告「近世日本経済思想と近代日本経済思想における連続と非連続」（国際研究集会「日本の経済思想」（二〇一三年三月六日～七日、於…国士舘大学））も有用である。
- (6) 速水融、宮本又郎（編）『日本経済史Ⅰ 経済社会の成立』（岩波書店、一九八八年）、第一、四、五章。とくに第五章の第四節は転換期としての十八世紀の経済を論じる。
- (7) 小室正紀『草莽の経済思想』（御茶の水書房、一九九九年）、とくに第四章。
- (8) 武内『論語の研究』（岩波書店、一九三九年）。のち『武内義雄全集』第一巻（角川書店、一九七八年）所収、四二～四四頁。
- (9) 加藤『真古文尚書集釋』（明治書院、一九六四年）、序論。
- (10) 武内、前掲注（8）『論語の研究』所収、吉川「解説」。引用の文は武内『武内義雄全集』第一巻五〇一頁。
- (11) 宮地『史料編纂所の歴史とその課題』（東京大学史料編纂所〔編〕『歴史学と史料研究』（山川出版社、二〇〇三年）、一六三～一六四頁）。

- (12) 久米「中井履軒の『論語』注釈方法に関する一考察——『論語逢原』『学而編』を中心に」(『中国学の十字路』(加地伸行博士古稀記念論集)、研文出版、二〇〇六年)。
- (13) グラフトンの研究、さらにはそれ以外の西欧文献研究発展史については、本書とほぼ同時に刊行された拙論「西欧・中国における文献研究の発展——十八世紀日本の比較対象として」(川口浩〈編著〉『日本の経済思想——時間と空間の中で』(ペリカン社、二〇一六年三月)所収)を参照されたい。本書への掲載が可能であれば、江戸後期日本の文献研究との比較考察が一書のなかにおいて可能であったが、刊行年月が重なったためそれは見送った。
- (14) 大久保『日本近代史学の成立』(著作集第七巻、吉川弘文館、一九八八年)。
- (15) B・A・エルマンは、*From Philosophy to Philology: Intellectual and Social Aspects of Change in Late Imperial China*, Harvard University Press, 1984 の刊行以来一貫(一貫)の主張を継続。"The search for evidence from China, Joshua Vogel (ed.), *Sagacious Monks and Blood-thirsty Warriors*, EastBridge, 2002, 'Early modern or late imperial? The crisis of classical philology in eighteenth-century China', Sheldon Pollock, Elman, et al (eds), *World Philology*, Harvard University Press, 2015 等においても同様である。ただし Elman は、'明代までの学問と清代の考証学との間の学問特性の違いを殊更強調し、それが本文にも引用した 'epistemological revolution' (Elman, 前掲 'Early modern or late imperial?') との表現にも顕れているように、すでに小島毅、伊東貴之らによる、宋代における経学発展が清代考証学の基礎であるとの指摘があり(本書第一章にてとりあげる)、筆者も、たとえば『尚書』研究では朱熹とほぼ同世代の呉棫(生没年不詳、一一二四年の進士)、同・呂祖謙(一一三七―八二)、同・陳大猷(東陽の人、生没年未詳)、『宋代尚書学案』にある東斎陳氏とは別人)、さらには宋末―元初・王柏(魯齋、一一九七―一二七四)、同・呉澄(草廬、一二四九―一三三二)、明・梅鷟らにおける「段階的」な研究の発展があり、その上に清初の朱彝尊(一六二九―一七〇九)、そして閻若璩(一六三六―一七〇四)、王鳴盛(一七二〇―九七)らによる研究の「大成」がなったとする立場である。
- (16) 木下『清朝考証学』とその時代——清代の思想』(中国学芸叢書、創文社、一九九六年)、「はじめに」、とくに七一〇頁。
- (17) これは明らかにエルマン、前掲注(15) *From Philosophy to Philology* (1984) を批判対象としたものである。ただし二

○一四年十二月刊行の日本語版（馬淵昌也ほか訳『哲学から文献学へ——後期帝政中国における社会と知の変動』知泉書院）の序文にてエルマンは、木下の批判などに多少の誤解があるとし、反駁を試みている。

- (18) 井上進「漢学の成立」、『東方学報』第六一冊（一九八九年）。のち井上『明清学術変遷史——出版と伝統学術の臨界点』（平凡社、二〇一一年）所収。

- (19) 木下、前掲注(16)『清朝考証学』とその時代——清代の思想」、一〇頁。

- (20) 『七経題義』については、懷徳堂文庫蔵の履軒手稿本を、旧一高文庫（現東京大学附属駒場図書館）蔵本と校合の上利用。武内義雄「懷徳堂と大坂の儒学」（『武内義雄全集』第十卷〈角川書店、一九八四年〉）、三五四頁にも引用。

- (21) たとえば大田錦城「古言辨」（『春草堂集』卷四所収）。

- (22) この文言は岩波日本思想大系『富永仲基・山片蟠桃』（岩波書店、一九七三年）所収の水田元久による「解説」のもの（六四七頁）。また、源了圓『徳川合理思想の系譜』（中央公論社、一九七二年）も江戸中期以降における同様の学的風潮の高まりを描く。

- (23) 西欧文献研究の発展系譜については、前掲注(13)、拙稿「西欧・中国における文献研究の発展——十八世紀日本の比較対象として」にて俯瞰を試みた。参照されたい。

- (24) 筆者は、江戸後期～幕末の日本儒者の文献研究・原典批判の実相を、中国の同時代の儒者ののみならず西洋のフィロロギー（とりわけ十九世紀ドイツにおけるギリシャ古典文言文研究）と比較検討する研究を、二〇一三年度より開始の科学研究費補助金事業をもって遂行中であるが、とくに二〇一五年度より、Benjamin A. Elman（プリンストン大学教授）のご協力をもって、これを西洋文献学の専門研究者であるAnthony Grafton 同大教授、Michael Witzel（ハーバード大学教授、Sheldon Pollock コロンビア大学教授、Michael Lackner 同大教授らとの共同研究を開始した。十八世紀日本の文献研究を世界の文献学の発展のなかに位置づけることを目的とする試みである。

あとがき

本書の構想はおおよそ筆者の前著の上梓と相前後する頃、すなわち二〇〇八年の後半ぐらいよりはじめられた。拙著の「結論」の最終節にて記したとおり、とりわけ、江戸後期～幕末期に発展をみた実証主義的、経験的学問とはどのようなものであったか、またそれがいかに儒学、漢学以外の多くの近代学問の「礎」となっていたかといった点の解明が次なる研究課題であると、筆者のなかで強く認識されてきていた。

研究をはじめた当初は、何人かの儒者についてのオーソドックスな思想史学的研究を積み重ねることで十分な成果がだせるのではないかと感じていた。だが、研究が進展するにつれ、分析視角、利用史料の双方において再考の必要性に強くせまられることとなる。

「日本」儒者にとって時間、場所双方の意味で「外国語」である中国古典テキストの研究には、必然として精緻な言語／原語研究が伴うものであったことはこれまでも指摘がある。訓点（語）研究や書物学は活況を呈しており、これらにおいて言語への接近などが特定の視点から語られることはあるが、その一方で、実際に正面から当時の儒者の言語研究がどうであったかについて具体的に詳細なアプローチを試みた研究はあまりないようにみえる。

また、特定の儒者のテキスト研究のみならず、彼らの知的性質を決定する素地とでもいうべき、もう少し広い「知識層」における知的鍛錬、そして知的「気候」といったものの実相の考察も不可欠であると考えるに至った。

これらの課題への対応を考えた結果、(a)多様な文書史料の活用と、(b)分析手法の拡幅が目指されることとなり、刊本、写本、あるいは手稿史料も含めた「書物」のオーソドックスな思想史的考察のほか、たとえば本書第五章にて用いた『読書準繩』のような学習の「やり方」を語る口述史料を用い、それを後代の学徒が語るところの教育経験と突き合わせて分析すること、さらにそれをフリッツ・リンカーやロジェ・シャルチエら教育思想家の観点／論点をもって新たな視点から再解釈することなどが試みられた。「学際的」というと浅薄で時代遅れに響くだろうが、複数の学問分野において各々に醸成されてきた固有の分析視角・方法を適切に接合／交錯させる試みは、とくに本書が主題とすることの解明には極めて有効であったと考える。

さらには、(c)江戸後期儒者の研究の「特質」を客観化するための比較検討の必要性も意識するようになり、これに伴い、中国、西欧における文献研究（または「フィロロギー」）を常に念頭に置きながら、比較思想的視野のなかに日本儒者の「古代テキストとの向きあい方」を客観的に位置づけることが目指されるに至った。

このように書くと、一部の研究者においてはたとえばマルク・ブロック『王の奇跡』に呈出される歴史へのアプローチ手法などが想起されるかもしれない。無論、本書はブロックの主要諸著作にみられるような壮大な構想力や総合性、包括性を有するものではないし、そもそもそれを下敷きに構想されたわけではない。また逆に、本書は、アナールのとくに初期の諸研究の多くに顕著な決定論的性向とは相容れないものである。しかしそれでも、この学派の系譜につらなる幾つかの研究は、筆者がいつもどこかで意識せざるをえなかったものであったかもしれない。

さて、中国、西欧における文献研究との比較思想的考察など、筆者一人の力では到底できまいとも考

えながら、淡々と十八・十九世紀の日本儒者の文献研究のやり方について考察をすすめ、適宜論文として発表をつづけていたのだが、その過程でまず、国際日本文化研究センターの共同研究会（笠谷和比古教授〈当時〉の研究班）にて、同センター教授で中国近世思想史がご専門の伊東貴之氏との出会いが叶い、つづいてまた別の研究会にて英語学史、言語研究発展史がご専門で、ドイツ・フィロロギーにも造詣が深い江藤裕之氏（東北大学教授）とも出会うことと相成った。

ケンブリッジ大学（ロビンソン・コレッジ副学寮長）のピーター・F・コーニツキー教授は長らく日本中世・近世の儒学・医学の文献研究、とくにその書誌学的研究に従事されておられるが、二〇一二年に筆者の本務校にてご講義いただいた頃より本格的な学術的交流をさせていただいている。

これらの大変に幸運な出会いに恵まれたと同時に、二〇一三年四月には科学研究費補助金事業「考証学・言語の学、そして近代的知性——近代的学問の「基体」としての漢学の学問方法」（課題番号二五三七〇〇九三）が採択され、右に触れた三名に加え、マーティン・コルカット教授（プリンストン大学名誉教授、史学史のグローバルな比較研究がご専門の佐藤正幸教授、清代考証学が専門の尾崎順一郎氏、日本思想史の大川真氏、相原耕作氏、日本史の宮田純氏らのご協力も得て、共同研究を発足させた。

二〇一四年からは東京大学東洋文化研究所における研究活動の機会もいただき、東大所蔵の膨大な貴重史料群へのアクセスも含めさまざまな恩恵にあずかっている。便宜を図っていただいた東文研の真鍋祐子教授、大木康前所長に心より感謝の意を表したい。

清代学問研究の泰斗ベンジャミン・A・エルマン教授（プリンストン大学）との学術交流は同教授が二〇一四年度に東文研客員教授をつとめられていた時期より始まった。以来、氏とは「Princeton-Tokyo International Philology Workshop」と銘打った文献研究の本格的国際研究計画を立ち上げ、来年（二〇一七

年)三月にはその第一回研究会を開催する予定である。のみならず、エルマン教授の文献研究の比較文明的考察の研究仲間でもあるA・グラフトン教授(プリンストン大学)、S・ポロック教授(コロンビア大学)、H・フォン・スターデン教授(プリンストン高等研究院)、M・ウィッツェル教授(ハーバード大学)らとの学術交流の道が開かれつつあり、ポロック教授主導のもとコロンビア大学を中核に計画されている‘Program in World Philology’との研究連携も現在計画中である。

これらの研究計画は、本書を起点に、日・中・欧の文献研究、原典批判の方法の微細の比較検討にまで刺さり込んだ研究を目指すものであり、そのための国際的な学術ネットワークの基盤として構築されつつあるものである。

本書の中心的課題の一部は、ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies)に採択され、二〇一四年度大会(八月、於スロヴェニア・リュブリアナ大学)に報告の機会をいただき、その折にはコーニツキー教授、W・J・ボートライデン大学名誉教授らに多岐にわたり貴重なご教示をいただいた。

本書各論編Iの第二、三、四章は各々『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所)第一六七冊(二〇一五年三月)、『東洋文化』(無窮会東洋文化研究所)復刊第一〇〇号(二〇〇八年)、同復刊第一〇九号(二〇一二年)に掲載されたものを基盤とする。一方、第一、五、六章は複数の学問分野の分析視角・方法を接合させる学際的研究も積極的に採用する学術誌、または成果論集に掲載された論文がもとになっている。

その上で、単行本としてまとめるにあたっては、右に述べたことくの国内外の各分野の専門研究者との学術交流、共同研究を通じて得られたさまざまな知見を適宜織り込みながら、新たな全体構想をもつて練り上げることが試みられた。たとえば〈総論編〉の第一章は國立臺灣大學日本學研究叢書二十一『思想史

から東アジアを語る』掲載の論考であり（二〇一四年七月入稿、諸事情により実際の刊行は二〇一六年二月）、この原形となったものは『アジア・日本研究センター紀要』（国士舘大学〈第八号、二〇一三年三月〉）収録の論考であるが、本書への収録までにはさらに、清代学問を専門とする前掲の伊東氏、尾崎氏、B・A・エルマン氏らとの継続的な研究会等での討議の機会において得られた知見、さらには中村春作、前田勉両氏の知見などを踏まえた修正が微に入り細に入り施されている。これらはまた、「結論」の改訂にも反映されている。

第二章も『東洋文化研究所紀要』収録からの約一年間に修訂がなされ、第三章は『東洋文化』掲載論文に大幅な増訂をへて前著『幕末期武士／士族の思想と行為——武人性と儒学の相生的素養とその転回』（御茶の水書房、二〇〇八年）に再録されたものだが、本書収録にあたっては本書の構想に合致するかたちでコンサイスに再編された。

第五章の初出は国際日本文化研究センター『日本研究』第四六集（二〇一二年）であるが、この論考は当初より方法的、史料的に江戸後期儒者の知的「素地」の探究を目指すなかで勘案されたもので、ほぼ原形のまま収録した。第六章の初出は笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』（思文閣出版、二〇一二年八月）、第七章は上村敏文・笠谷和比古編『日本の近代化とプロテスタンティズム』（教文館、二〇一三年三月）であるが、各々若干の修訂をもって収録した。

「結論」の初出は笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』（思文閣出版、二〇一五年三月）であるが、当然、本書の総まとめの議論として的大幅な増補、議論の修訂が為されている。

また、本書の執筆過程においては、上記の研究者以外にも実に夥しい数の先学、諸方面の関係諸氏からのご教示、ご助言をいただいている。

オックスフォード大学名誉教授ジェームス・マクマレン氏は筆者が最も敬愛する研究者であり、筆者は同大学に長期滞在した時（二〇〇三年）よりその深遠なる学識の恩恵をうけている。元国際日本文化研究センター教授笠谷和比古氏（現帝塚山大学教授）には、氏が日文研の共同研究会を組織されておられた時よりお世話になっている。日文研笠谷班、同伊東班所属の諸研究者との議論の機会はまことに貴重であり、とくに笠谷班のメンバーであった魚住孝至、前田勉、谷口昭、谷井俊仁（故人）、岩下哲典、宮崎修多の諸氏、伊東班の徐興慶、小島毅、恩田裕正、片岡龍、李梁の諸氏には感謝申し上げたい。

斎藤修、尾高煌之助両先生には筆者がロンドン大学の大学院生であった頃よりお世話になっており、その深遠にして幅広い学識は常に筆者の敬服するところである。斎藤先生よりご紹介いただいた佐藤正幸先生からは比較史、歴史理論の視点の重要性についてご教示をうけ、日本史、日本思想史を世界史的視野に位置づける研究のヒントを学んだ。

日本思想史学の土田健次郎、黒住眞、澤井啓一、田尻祐一郎、中村春作、中村安宏の諸先生方、日本経済思想史学会の小室正紀、藤井隆至両先生、中村宗悦、見城悌治、落合功、高橋周、三澤勝己の諸氏、「日本の経済思想」(JETS) 主宰の川口浩先生、同会メンバーの岩井方男先生、ヤン・シーコラ（カレル大学）、武藤秀太郎、B・グラムリヒ・オカ、石井寿美世の各氏からも、直接のご指導の機会をいただいたり、あるいはまたご著書、ご論文を通じてその学恩に触れる機会をいただいた。

そのほか、一人一人お名前をあげることは叶わないが、多くの先生方や専門外の研究者、さまざまな縁の方々の学恵にあずかった。

大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵の中井履軒直筆の諸著作とその写本、ならびに関連史料、久米美術館所蔵の久米邦武の諸著作物と関連諸史料、茂原市立美術館・郷土資料館の東條一堂関連史料なしには本

書「各論編Ⅰ」に収めた諸研究は成立しなかった。そのほか東京大学、ケンブリッジ大学をはじめとする諸大学の専門図書館・史料室所蔵の貴重史料群、無窮会専門図書館、国立公文書館内閣文庫といった諸資料館や文庫、そして各々の機関においてお世話いただいた司書・学芸員のみなさまに感謝の意を表したい。本書の出版は、平成二十七年国士舘大学出版助成により可能となったものであり、同僚諸氏と関係各位のご厚意に感謝したい。

また、本書の出版を快くお引き受けくださった思文閣出版、編集のご担当で始終丁寧かつ的確な修訂作業を続けていただいた田中峰人氏に深く御礼を申し上げる。

最後に、妻伸子は二十五年にわたり不断なく、快晴の日も雨の日も、そして大嵐の最中も筆者の研究生活が無条件に支えつづけてくれている。また、おなじ道にすすみつつある二人の子供たちとの対話は心地よい知的刺激の機会である。心より感謝したい。

平成二十八年二月一日

竹村英二

索引

*採録語句が章・節のタイトルに含まれる場合は該当頁をゴシック表記にした。

【人 名】

あ

藍弘岳	168
青木洋司	109, 110
赤松蘭室	52
安積澹泊	179
朝川善庵	97
飛鳥井雅道	24
アストリュック、J	8, 22, 209, 212
阿部正弘	85
新井白石	21
アルノー、A	209
安西敏三	23

い

井口孟篤	20
石川謙	36, 128, 142
石河幹明	143, 144, 146
井田進也	23
市野迷庵	128
伊藤仁斎	13, 21, 89, 90, 94, 95, 97, 199, 215, 218~20, 223
伊東貴之	32, 77, 78
伊藤東涯	13, 51~3, 199
伊藤蘭嶠	13, 51, 53, 76, 78
稲葉迂斎	129
稲葉徳一郎	207
井上金峨	5, 12, 97, 219
井上進	32, 77
井上哲次郎	6, 187
井上蘭臺	174
今道友信	215

う

ヴィーコ、G-B	14, 22, 212, 213, 215, 216, 210, 211
ヴィラモーヴィッツ=メレンドルフ、 U・v	212, 213
ヴェルヌ、J	19, 189
ヴォルフ、F・A	14, 212, 213

え

衛宏	59, 60
易順鼎	85
江藤裕之	214
江村北海	128, 129, 135, 142
閻若璩	30, 32, 52, 54~6, 76~8, 86, 104, 106, 107, 109~11, 117, 206, 215, 216, 218, 219

お

王引之	86, 104, 219
王炎	53
皇侃	93
王元美	161, 162, 180
王充	72, 104
王肅	63, 65, 68, 75, 76, 107, 112
王念孫	86, 104, 219
王柏	51, 53, 56, 63, 66, 206
汪伯玉	161
王鳴盛	30, 32, 52, 54~7, 59~63, 65, 67, 71, 72, 76~8, 107, 216~9
王勇	168
歐陽生	56, 64, 72
王魯齋	53, 78
大久保利謙	9, 10, 22, 27, 28, 31
大田錦城	5, 12, 13, 28, 31, 55, 56, 61~8, 72~6, 86, 96, 104, 112, 117, 118, 216,

218, 219
 大谷敏夫 32, 77
 大庭脩 54, 168, 169
 岡崎勝世 209, 210
 岡田袈裟男 33, 34
 岡田白駒 52
 岡松甕谷 187, 193, 194
 荻生徂徠 3, 13, 21, 31, 33~5, 47, 50, 51,
 53, 89, 90, 96~8, 136, 139, 141, 142,
 161, 162, 169, 170, 172, 178~80, 188,
 194, 199, 216, 219, 220
 落合陽子 26

か

何晏 94
 海保漁村 5, 12
 郝敬 51, 52, 78, 106, 206
 郭守敬 51, 53
 郭正域 170
 夏侯建 56, 64, 72
 夏侯勝 56, 64, 72
 笠谷和比古 219
 カソウボン、I 8, 13
 片山兼山 170
 ガッテラー 22, 209, 210, 212
 加藤常賢 6, 7, 206
 金谷治 27, 65, 74, 118
 狩野直喜 3, 4, 10, 12, 21, 31
 亀田鵬斎 85, 97
 狩谷棧斎 5, 12, 28, 31, 104, 118, 218, 220
 顔子 96
 韓愈 117, 162, 163, 171, 172, 180, 181

き

菊池(箕作)大麓 143, 146, 150
 岸田知子 187
 魏徵 65
 木下鉄矢 10, 11, 32, 77, 78
 恭王 67, 70~2
 金謝山 55

く

グーチ、G・P 212, 216

屈萬里 177
 熊阪臺洲 170, 172
 久米邦郷 103
 久米邦武
 7, 12, 21, 22, 27~31, 33, **103**, 208, 224
 久米祐子 8
 孔穎達 64, 65, 67, 75, 106, 111
 グラフトン、A 9
 栗島紀子 25
 黒住眞 33

け

児寛 64
 恵棟 104, 106, 218
 ケーベル、R・v 223
 阮元 86, 103, 107
 元帝 113

こ

胡渭 55
 孔安国 56, 66~70, 73, 75, 116
 孔子 75, 87, 91, 96, 221
 江聲 6, 52, 55, 78, 106, 206, 218
 黄宗羲 107, 206
 幸田成友 33
 皇甫謐 63, 107, 112, 113
 康有為 71, 74, 76
 呉英 86
 顧炎武 32, 55, 86, 104, 107, 117, 206
 古賀謹一郎 103
 古賀侗庵 97, 128
 呉才老(械)

50~4, 56, 66, 106~8, 113, 117

呉草廬(澄) 51~3, 56, 59, 66, 73, 78,
 104, 106, 107, 111~7, 206, 215

小島毅 32
 コックリル浩子 26
 呉訥 169
 小森陽一 189, 190
 近藤光男 31

さ

蔡沈 49, 53, 104, 106

斎藤毅 25
 齋藤文俊 27
 齋藤希史 25, 26, 186
 齊藤美野 26
 阪谷朗廬 20, 23, 24, 146, 189
 嵯峨寛 86
 左丘明 175, 176
 佐久間象山 23
 佐藤一斎 128
 佐藤直方 129

し

塩谷宕陰 27, 194
 重野安繹 7, 21, 27, 28, 30, 31, 33, 224
 司馬光 173
 司馬相如 172
 司馬遷 63, 73, 175, 176
 洪江拙斎 31
 下郷次郎八 52
 シモン、R 8, 22, 209, 212
 謝枋得 169
 シャルチュエ、R 35, 36, 126, 142
 朱彝尊(竹垞) 67, 68, 104, 107, 118, 206
 朱熹(朱子) 8, 50~2, 66, 93, 104, 107, 108, 115, 116, 173
 シュライアマハー、F・D・E 14, 213
 シュレーツァー、A・L・v 22, 209, 212
 荀子 96
 鄭玄 63, 65, 104, 107, 176, 217
 莊田平五郎 207
 徐師曾 169
 白石眞子 162, 163, 169
 新藤咲子 25
 眞徳秀 168, 169

す

スカリガー、J 8, 13
 村士玉水 129, 138
 鈴木善教 128
 スペンサー、H 200

せ

薛敬軒 53

銭大昕 86, 104, 218

そ

臧曹 113
 ソクラテス 23
 蘇頌 53
 蘇軾 107
 蘇東坡 53
 蘇愉 113
 孫星衍 6, 106, 107, 206

た

高谷龍洲 187, 193
 高橋章則 172
 武内義雄 4, 6, 7, 10, 12, 30, 31, 47, 206, 218, 219, **222**
 武田勘治 36, 126, 128, 129, 142
 太宰春臺 13, 30, 31, 33~5, 50, 51, 53, 136, 139~42, **161**, 188, 194, 223
 田尻祐一郎 33
 田中彰 119
 田中萃一郎 224
 田中知周 **128**, 208
 田辺紀久子 26
 段玉裁 6, 86, 104, 107, 206

ち

張衡 172, 173
 張燧 173
 晁錯 70, 72
 張霸 56, 64, 75
 陳繹曾 169
 陳騏 170
 陳新安 53
 陳大猷 51, 53

て

程伊川 89
 鄭沖 107, 113, 215

と

陶鴻慶 85
 唐順之(荊川) 177

東條一堂
5, 12, 28~30, **85**, 104, 118, 220, 221
戸川芳郎 33
徳富蘇峰 20, 189
富永仲基 60, 76, 221, 222
ドロイゼン、J・G 33

な

内藤湖南 4, 10, 12, 21, 31, 221, 222
永井荷風 196
中井甃庵 47
中井竹山 47
中井履軒 5, 8, 11~3, 29, 30, 32, **47**, 112,
118, 207, 215, 218, 219
中江兆民 20, 22~5, 187, 189, **193**, 196
長沼美香子 26
中村敬宇
18, 19, 23, 24, 188, 192, **195**, 200
中村春作 24, 25, 35, 36, 126
中村久四郎 27, 31
鍋島直大 103

に

ニーブル、B 209
西周 18, 148, 200
西田幾多郎 20~2, 25

ね

根本武夷 13, 31

の

野村茂夫 107, 111, 116, 117

は

ハーバーマス、J 151
梅蹟 56, 64, 65, 70, 75, 76, 107, 109, 111
~4, 116, 215, 217
梅鶯 51, 52, 76, 78, 104, 106, 107, 111,
112, 117, 206, 215
波多野太郎 28, 85, 90
服部南郭 141, 162, 170, 177, 181
馬廷鸞 108~11
馬融 65, 104, 107

馬場辰猪 24
濱口富士雄 31, 77
林述斎 128
林羅山 28
班固 64, 67, 72, 76, 172, 173
伴信友 21

ひ

皮錫瑞 109, 110
尾藤二洲 97
日原利國 89
平賀晋民 128
平沼淑郎 127, 143~7, 149, 150, 208
平山潜兵 128

ふ

福澤諭吉 18, 23, 186~8, 190, 193
伏生 54, 56, 59, 63, 64, 71, 104, 107, 111,
114, 217
福地桜痴 187, 189
布施維安 128
フッサール、E 12
武帝(漢) 72
プラトン 23
ブルデュー、P 10

へ

ベック、A 14, 212~4, 216, 218
ヘルマン、G 14, 213
ヘロドトス 13, 210

ほ

帆足萬里 193
方東樹 86
星野恒 27, 31
ホメロス 211~3, 215
ポリツィアーノ、A 13
本郷隆盛 206

ま

前田勉 3, 24, 97, 146, 147, 150, 151
町田三郎 221
マッケンジー、D・F 36

松崎慊堂
5, 12, 28, 31, 104, 118, 147, 218, 219
松沢弘陽 23
松沢老泉 118
松本三之介 23, 24
丸山真男 206
マレー、G 213

み

三浦秀一 97
三島中洲 187
水上雅晴 86
水田紀久 76, 77, 207, 222
水野的 26
溝口雄三 193
箕作秋坪 143, 145, 146
皆川淇園 85, 97
源了圓 24
御法川牧子 25
三宅眞軒 20
宮崎有成 129
宮地正人 7
宮村治雄 23
ミュラー、M 214

む

武藤虎峯 207
村岡典嗣 21, 22, 214, 215

め

メルロー＝ポンティ、M 12, 205～7

も

毛奇齡 55, 86, 104
孟子 90, 96, 97
茂住實男 26, 36, 142, 151
本居宣長 21
森鷗外 187
森岡健二 25, 26, 143
森田思軒 19, 20, 22, 188, 189, 193, 196

や

安井息軒

5, 12, 20, 93～5, 103, 104, 118, 194, 220
安酸敏眞 214
柳田泉 20, 189
柳父章 26
矢野竜溪 189
山県周南 162, 163, 169, 170, 177, 178
山崎闇斎 128
山田孝雄 25
山田博雄 25
山井鼎 13, 21, 31, 55, 170, 215, 216, 233
山本北山 5, 12, 97, 112

ゆ

湯浅常山 52
ユーゴー、V 19, 189

よ

楊升菴 53
楊慎 206
揚雄(子雲) 110, 172, 173
横井小楠 97
吉川幸次郎 6, 21, 22, 33, 55, 75, 196
吉田篁墩 5, 12, 28, 97, 218, 219
吉田純 3, 4, 32, 77
吉野金陵 103
芳村弘道 169

ら

ランケ、L・v 33, 209

り

リース、L 33
李于鱗 161, 162, 172, 180
陸弘祚 170
陸徳明 59
李獻吉 161
李善 68, 170
李塗 169
劉勰 169
劉向 64, 73, 104
劉歆 59, 68, 71, 72, 75, 76
劉鉉 106
劉孝標 171

劉節	170
柳宗元	162, 163, 171~3, 180, 181
劉台拱	86
梁柳	113
呂治平	53
呂思勉	71
呂祖謙	50, 53
リンガー、F	35, 36, 126
林之奇	53, 56, 107~11

ろ

ロック、J	6, 12
-------	-------

わ

和辻哲郎	30, 209~13, 218, 222
------	----------------------

【史資料名】

あ

新しい学(諸国民の共通の自然本性につ いての新しい学の諸原理)	14, 211~3, 216
------------------------------------	----------------

い

一年有半	193, 194
逸周書	72
イリアス	211

え

永樂大典	85
------	----

お

オデュッセイア	211
---------	-----

か

学則(荻生徂徠)	34
鶴峯漫談	143~5, 208
学問捷徑	128
夏書逢原	50

「漢学不可廃論」(中村敬宇)	18, 19, 195, 197, 198
韓詩外傳	89, 90, 95, 97
漢書	67, 70, 71, 139, 218
漢書恭王傳	72
漢書藝文志	57, 67, 68, 72, 73
漢書儒林傳	57~9, 64, 71
漢書楚元王傳	71
漢書晁錯傳	59
漢書本紀(漢紀)	67, 68

き

九經談	64, 66, 67, 74, 96, 107, 112, 118, 216
今文尚書纂言	51~4, 56, 58, 59, 66, 73, 106, 111, 113, 215

く

孔子家語	68, 73
孔叢子	68, 73
久米邦武文書	105

け

經學通論	109
經義考	67, 68
經子史要覽	172, 173
經史問答	55
芸術の規則	10
經世学論	128
經籍訪古誌	31
經典釋文	59, 65, 85, 86
經伝釋詞	177
「言文論」(森鷗外)	187

こ

校勘記	107, 111
孝經	73, 139
皇清經解	31, 86, 103, 104
孔伝	59
洪範正論	55
後漢書	173
古義堂文庫目録	51, 216
五經正義	67, 111

五經辨訛 53
「古今文聚訟」(久米邦武)
105, 111, 112, **113**, 118
國語 86, 139
國民之友 190
梧窓漫筆 56, 63, 107, 112
古文尚書考 106, 218
古文尚書撰異 107

さ
「再論原論自由」(中江兆民) 193
作文初問 162, 163, 169, 170, 177
「策論」(中江兆民) 23
「作家苦心談」(森田思軒) 188, 193

し
爾雅 86, 177
「史学考証の弊」(久米邦武) 208
四家雋 172
史記
63, 69, 70, 75, 76, 109, 139, 175, 176, 218
史記儒林傳 58, 59, 61, 71
詩經 163, 173, 176, 178, 179
詩經標識 85
四庫全書 108
紫芝園稿 **162**, 173
紫芝園後稿 162
資治通鑑 139
詩書古傳 50, 177
詩體明辨 169
七經雕題 47, 48
七經雕題畧(書) **47**
七經逢原 47~50, 56
七經孟子考文 29, 31, 55, 216
實用館讀例 128
師辨 97
周易 139
集外詩文 68
十三經註疏 31, 104
十七史商榷 62, 66, 216, 217
集釋 177
集疏 94
授業編 128, 129, **136**, **142**, 151

朱子語類 50, 53, 54, 56, 66, 90, 106, 108,
113, 115, 116
春秋 139
春秋公羊傳 89, 90, 94, 97
春秋左氏傳 75, 175, 176, 194
春草堂集 216
小学 131
焦氏筆乘 173
尚書(書經) 30, 32, **47**, **103**, 139, 163,
168, 173, 176, 206, 207, 215, 217, 218
尚書解 52
尚書義疏 106
尚書去病 52
尚書今古文注疏 118
尚書後案 30, 32, 52, 54~7, 59, 61~3,
66, 76, 78, 107, 217, 218
尚書考異 51, 52, 76, 106, 112, 116, 215
尚書後辨 72, 76, 217
尚書古今文注疏 106
尚書古文疏證 30, 32, 52, 54~6, 76, 78,
106, 107, 109, 118, 215~8
尚書集注音疏 52, 55, 78, 107, 218
尚書正義 106, 111
尚書全解 52~4, 56, 107~9
尚書大傳 86, 92, 93, 104, 107, 111
尚書注疏校勘記 104
尚書雕題 49, 53
尚書日知禮記 **105**, 109, 111, 117
初學課業次第 128
書疑 51~4, 56, 58, 63, 66
書經集傳 49, 53, 104~6, 111
書經叙録 117
諸國民の共通の自然本性についての新
しい学の諸原理→新しい学
書集傳或問 51, 53
書集傳纂疏 53
書説 51, 53
書伝 107
書反正 51
書神傳 50, 51, 53, 54, 56, 106
書逢原→七經逢原
詩論 163
新學偽經考 71, 74

晉書	111
す	
隋書經籍志	63, 65
せ	
西河合集	55
正字通	169, 170
聖書	8, 22, 209, 212
正文章軌範評林註釋	169
西洋事情	190
世界史(ガッテラー)	22, 209
世界史試論(ガッテラー)	22, 209
説文解字	86
説文解字注	86, 107
潜研堂文集	86
千百年眼	173
そ	
宋代尚書学案	51
滄溟先生尺牘	141
た	
太玄録	172, 173
大日本史	27
断腸亭日乗	196
ち	
中庸	48, 77
雕題	49, 50
「雕題附言」(書)	47
雕題畧	11
つ	
通志堂經解	51, 52, 54, 58
て	
哲学字彙	187
典引	173
典籍	168
典謨接	53, 54

と	
燈下書	162, 181
(新)唐書藝文志	65
讀書矩	128
讀書指南	128
讀書準繩	128, 136, 142, 151, 208
読書路径	128
讀李于鱗文	162
に	
日知録	55, 117
「日本文章の将来」(森田思軒)	19, 188, 190, 191
は	
梅賾古文尚書	49, 50
ふ	
福澤諭吉伝	143, 144
伏生尚書	49, 50
文献学的な諸学問のエンチクロペディ	
ーならびに方法論	14, 212, 213
文献通考	106
文章一貫	177
文章歐冶	169
文章規範	169
文章緒論	170
文章精義	169
文章正宗	168, 169
文章辨體	169~71, 174, 177
文章辨體式	169
「文章論」(福地桜痴)	187
文心雕龍	169
文筌小言	170, 177
文則	170, 177, 194
文體明辨	169~71, 174, 177
文論(太宰春臺)	
161~3, 166, 167, 174, 175, 178, 180, 181	
「文論」(福地桜痴)	187
へ	
碧梧玩芳集	108

辨疑録	51
編年日本外史	196
ほ	
方法叙説	209
ポール＝ロワイヤルの論理学	210
本朝通鑑	27
「翻訳の心得」(森田思軒)	188, 190, 193
み	
「三宅眞軒先生」(西田幾多郎)	20
民約譯解	24, 25, 187, 194
民約論	24
も	
毛詩	139
孟子	89
文選	67, 68, 85, 139, 169～74, 177
文選音義	170
文選音註	170
文選纂註評苑	170
文選字引	169
文選章句	170
文選正文	169, 170
文選批評	170
文選補遺	170
や	
譯文筌蹄	33, 34, 131, 141, 142, 179, 180

よ	
揚子法言	172, 173
揚子法言集註	173
れ	
歴史(ヘロドトス)	13, 210
ろ	
老子王注	28
老子王注標識	90
六經集傳	108
六經略説	174
六臣註文選	169
「論学弊疏」(中村敬宇)	18, 20
論語	8, 75, 85, 103, 139, 221, 223
論衡	59, 72, 104
論語義疏	31, 93
論語古義	94, 216
論語古訓	31
論語集説	93～5
論語知言	86, 87, 97, 220
論語徴	90
わ	
「我邦に於る漢学の現在及び将来」(森田 思軒)	189, 190, 192
倭讀要領	33, 34, 131, 139, 141, 142, 166, 168, 170, 172, 174, 175, 178, 180, 181

◎著者略歴◎

竹村 英二 (たけむら・えいじ)

1962年生。豪メルボルン大学卒、米カリフォルニア大学バークレー校に交換留学生として在学。英ロンドン大学大学院修了。現在、国士舘大学教授。オックスフォード大学ペンブローックカレッジ、同大学クライストチャーチ上級研究員交流室(SCR)ならびにハイテーブルメンバー(2003、2004年)、慶應義塾大学訪問教授等を歴任。ケンブリッジ大学ロビンソン・カレッジ客員フェロー(2016年)、東京大学東洋文化研究所研究協力者(2014年～)等を兼務。

業績

〔単著〕『幕末期武士／士族の思想と行為——武人性と儒学の相生的素養とその転回』(御茶の水書房、2008年)／*The perception of work in Tokugawa Japan: A Study of Ishida Baigan and Ninomiya Sontoku*, UPA, Lanham, Oxford, 1997.
〔論文〕「元～清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判——中井履軒『七經雕題畧(書)』、同収「雕題附言(書)」を題材に」(『東洋文化研究所紀要』〈東京大学東洋文化研究所〉第167冊〈2015年3月〉)／‘Confucian Origins of modern Japanese evidential scholarship’, *Storia della Storiografia (History of Historiography-Histoire de l’Historiographie-Geschichte der Geschichtsschreibung)* 68, Fabrizio Serra Editore, via Santa Bibiana, 11 56100 PISA Rivista internazionale, 2016 (言語：英語。2016年6月刊行予定。掲載決定済)。

え どころ き じゆしゃ
江戸後期儒者のフィロロギー
——げんでん ひはん しょう 原典批判の諸相とその国際比較——こくさい ひかく

2016(平成28)年3月3日発行

定価：本体5,500円(税別)

著 者 竹村 英二

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

装 幀 白沢 正

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎
製 本

© E. Takemura

ISBN978-4-7842-1838-7 C3021

徳川社会と日本の近代化

笠谷和比古編

同時代のアジア諸国の多くが欧米列強の植民地に編入され、あるいは蚕食の危機にさらされるなか、明治政府が独立を堅持できたのは、先行する徳川社会の文明史的力量によるところが大きい。徳川社会はどのような力をいかにして形成し得たのか、多分野の研究者が総合的に究明する論文25篇。国際日本文化研究センター共同研究の成果。

▶ A 5判・730頁／本体9,800円(税別)

ISBN978-4-7842-1800-4

一八世紀日本の文化状況と国際環境

笠谷和比古編

日本の18世紀社会は、儒学・本草学・博物学・蘭学などさまざまな局面において独自性に満ちた文化的発展をみせ、近代化に多大な影響を与えた。こうした18世紀の文化的状況はいかにして形成され、グローバルな環境下でどのような影響を受けつつ展開したのか、総合的に探究する。国際日本文化研究センター共同研究の成果。

▶ A 5判・582頁／本体8,500円(税別)

ISBN978-4-7842-1580-5

廣瀬淡窓

井上敏幸監修・高橋昌彦編著

江戸時代後期、豊後日田に生まれ活躍した儒学者・教育者・漢詩人、廣瀬淡窓（1782～1856）の評伝。従来の評伝が、淡窓の著作に傾注して叙述されてきたのに対して、本書では、淡窓の日記や自叙伝、著書をはじめ、書簡や漢詩、周辺史料などから淡窓の生涯を再検討し、新たな淡窓像を構築する。とくに漢詩を多くとりあげ、その背景についても解説。著述と出版についても、最新の調査をふまえて詳細に検討する。

▶ B 6判・334頁／本体2,500円(税別)

ISBN978-4-7842-1817-2

熊沢蕃山の思想冒険

山田芳則著

近世の儒者・熊沢蕃山（1619～91）の一つひとつの著作を比較することで、思想の変化を跡づけ、その意味を問う。また中江藤樹『翁問答』や池田光政の藩政改革をとりあげて、岡山藩における蕃山の政治体験の意味を解明、蕃山の多様な思想を立体的に浮かび上がらせる。

▶ A 5判・218頁／本体5,000円(税別)

ISBN978-4-7842-1783-0

近世儒者の思想挑戦

本山幸彦著

江戸開府から大政奉還までの近世265年間を、成立・安定・動揺・崩壊の4期に分け、各時代の代表的儒者・思想家である林羅山・熊沢蕃山・貝原益軒・荻生徂徠・松平定信・佐久間象山・横井小楠らを取りあげ、彼らが直面した時代の課題にいかに関与したのか、その思想的営みの足跡を追う。

▶ A 5判・314頁／本体7,500円(税別)

ISBN4-7842-1304-X

会沢正志斎書簡集

大阪大学会沢正志斎書簡研究会編

大阪大学大学院文学研究科が所蔵する会沢正志斎書簡を活字翻刻。会沢正志斎は、後期水戸学を代表する儒学者の一人。本書簡群は、会沢が、弟子で甥でもある寺門政次郎およびその父喜太平に対して宛てた書簡を中心とする。緊迫する幕末の情勢と、そのなかで行われた思想の営為を解明するための一級史料。

▶ A 5判・350頁／本体11,500円(税別)

ISBN978-4-7842-1828-8